



ヨーロッパの使節を引見するムガル皇帝

(解説 本誌 132 頁)

【著書論文目錄】(自一九五〇年九月至一九五〇年十二月)

國史關係 [著書]

歷史學の成果と課題 歴史學研究会編

(A5・一八〇頁 岩波書店 一八〇頁)

科學文化史年表 湯淺光朝著

(B5・二五〇頁 中央公論社 五五〇頁)

中尊寺と藤原四代―中尊寺學術調査報告―

朝日新聞社編 (A5 二六〇頁 朝日新聞社

三〇〇頁)

日本文學評論史詩歌論篇 久松潜一著

(A5・至文堂 五〇〇頁)

日本文學史 藤生磯次著

(R6・至文堂 二〇〇頁)

頭註佛文學集 藤村作著

(至文堂 二〇〇頁)

日本勞働組合史 末弘巖太郎著 (A5・二五

六頁 日本勞働組合史刊行會 二八〇頁)

觀音菩薩の研究 梅原隆嗣遺稿

(B5・二一三頁 梅原隆章 二〇〇頁)

日本佛教史中世編之四 辻善之助著

(B5・四五八頁 岩波書店 六五〇頁)

儒教の研究 津田左右吉著

(A5・五〇二頁 岩波書店 六〇〇頁)

封建社會の構造分析 土屋喬雄著

(A5・三三七頁 勁草書房 三五〇頁)

國語音韻の研究 橋本進吉博士著作集第四冊

(A5・三七〇頁 岩波書店 四三〇頁)

日本資本主義と國有經營 島恭彦著

(A5・二八四頁 日本評論社 四五〇頁)

日本人民の歴史 羽仁五郎著

(岩波新書 二〇九頁 岩波書店 九〇頁)

改訂日本食物史上 足立勇著

(A5・四七九頁 大谷書店 四五〇頁)

同 下 同著 (A5・五〇〇頁 大谷書店

四五〇頁)

大内時代とその文化 三輪孝編

(A5・四〇頁 山口縣知事公室)

埋もれた金印 藤間生大著 (岩波新書 二二

二頁 岩波書店 九〇頁)

日本評論史 藤村作著

(A5・二二六頁 岩波書店 三〇〇頁)

朝鮮巫俗の現地研究 秋葉隆著

(A5・一九八頁 養徳社 三〇〇頁)

日本民俗學概説 和歌森太郎著

(B6・二九七頁 東海書房 一三〇頁)

近代における西洋人の日本歴史觀 牧健二著

(B6・二八六頁 弘文堂 二五〇頁)

明治政治史 信夫清三郎 (B6・アテネ新書

一八六頁 弘文堂 二五〇頁)

日本勞働運動史 岸本英太郎 (R6・アテ

ネ新書 二〇〇頁 弘文堂 一七〇頁)

日本史辭典 藤井甚太郎・石川幹之助監修

鮎澤新太郎・鎌田重雄編 (A5・四五四頁

誠文堂新光社 五〇〇頁)

天皇史 肥後和男著

(B6・三四九頁 富山房 四〇〇頁)

同時代史 第三卷 三宅雪嶺著

(A5・五一四頁 岩波書店 八〇〇頁)

人物日本史 川崎庸之編 (B6・三四五頁

毎日新聞社 二三〇頁)

史學研究記念論集 廣島文理科大學史學科教

室編 (A5・六一八頁 柳原書店 八五〇

頁)

中世協同體の研究 和歌森太郎著

(B5・二八八頁 弘文堂 三五〇頁)

幕末洋學史 沼田次郎著

(A6・二七六頁 刀江書院 三五〇頁)

封建社會の構造分析 土屋喬雄著

(B5・三三八頁 勁草書房 三五〇回)

明治の政治家たち―原敬につらなる人々―

上巻 服部之總著(岩波新書 一九四頁 九〇回)

日本絶対主義の形成 前島省三者 (B6・二八五頁 双岳社書店 一八〇回)

山寺の入定窟調査について 山形縣文化遺産保存協會(B5・四四頁)

飛鳥彫刻細見 寺尾 勇著 (B5・九九頁 四二葉 奈良美術研究所 一〇〇〇回)

日本灌溉水利慣行の史的研究 北村俊夫著 (岩波書店 一五〇〇回)

日本史概説下巻 坂本太郎著 (B5・八四二頁 至文堂 三三〇回)

〔雜誌論文〕

史學雜誌 五九ノ八(八月)

日本中世禪林における臨濟・曹洞兩宗の異同(下)―「林下」の問題について 玉村 竹二

同 五九ノ九(九月) 岩生 成一

朱印船の貿易額について 同 五九ノ十(十月)

《學界動向》國學史研究の動向 伊藤多三郎

《資料紹介》 借上と土倉 奥野 高廣

同 五九ノ十一(十一月) 阿部 武彦

同 五九ノ十二(十二月) 親鸞の消息について―服部之總氏の批判に答えて― 赤松 俊秀

史林 三三ノ五(九月) 我が律令時代の里と郷とについて 曾我部靜雄

同 三三ノ六(十二月) 北陸門徒の關東移民 五來 重

同 三三ノ六(十二月) 歴史學研究 一四七(九月) 日本漁業における封建制の問題―漁業近代化の一形態― 小沼 勇

近代日本思潮史の一視角―科學としての近代思想史の確立のために― 豊田 四郎

江戸時代の農家の人的構成の變化―宗門改帳からみた信濃佐久地方― 市川雄一郎

同 一四八(十一月) 幕末維新の經濟段階について―マニユファクチュア問題前進のために― 矢木 明夫

維新前の段階について 藤田 五郎

〔幕末・小營業段階説〕と私の立場

方法の問題―絶対主義について― 堀江 英一

日本封建社會の思想史研究―學說史的なノット― まつしま・えいいち

同 一四九(廿六年一月) 院政政権の歴史的評價 林屋辰三郎

日本における領主制の發展 稻垣 泰彦

近世農村構造の一形態―松代藩の農村構造― 鈴木 壽

日清戦争と朝鮮貿易 南 とく子

絶対主義下の階級經濟關係―堀江氏に答える― 河野 健二

社會構成史大系 第八回 近世における商業的農業の展開 古島 敏雄

新日本史講座 第十回 古代前期の文化 杉原 莊介

封建前期の産業經濟 寶月 圭吾

封建後期の社會思想 辻 達也

資本主義時代の社會思想 鳥井 博郎

日本帝國主義の發展 江口 朴郎

海賊の本質について

長沼 賢海

同 三〇(十一月)

高柳 光壽

日本の鐵道の沿革

八十島義之助

徳川期に於ける九州農村發展の諸類型

香村 選三

維新史の一小間

中村 元

旅行と經濟

高柳 光壽

近世東北地方に於ける近江商人の活動

曾我 四郎

浄土教とキリシタンとの對況

池田 越子

西行をめぐる

和田繁二郎

歐船來航以前の海外交通と技術的制約

森 克己

シドツチの日本入國のローマの風聞

板澤 武雄

「柳橋新誌」における批判精神

平野義太郎

越後杜氏の研究——積雪地農村經濟史の一齣——

佐藤 元重

平泉のミイラ

金田一京助

古代における外來文化と民族文化

川崎 庸之

日本史基礎講座 第八講 近代(丁)

小西 四郎

九州風土記の成立

田中 卓

万葉集の形成

西郷 信綱

一西國武士の參勤扈從船中記

日高 次吉

記紀成立の背後にあるもの

上田 正昭

古代歌謠

杉浦 明平

室町期頃南島の通貨

東恩納尊寬

近畿における宮座の歴史的 성격

萩原 龍

万葉集と古今集との間

窪田章一郎

十七世紀初めの古寫日本圖

岡本 良治

「蝦夷」の讀みかたの疑

丸山 二郎

同 一八ノ十(十月)

武川 忠一

「天照大神」概念の成立

長野 正

維新史の一小間(下)——或る農民の日記から——

高柳 光壽

《特集・日本の小説》

上居 光知

宗教の政治權力への轉化

西岡虎之助

史學に於ける決定論と自由意志説

野々村戒三

物語の本質

風巻景次郎

仙臺藩の持高制限令の貫文刷

兒玉 幸多

現代歴史學の相貌

上原 專祿

小説としての説話

西尾 光一

末法證明記と愚管抄

西尾陽太郎

駄送りと宿繼

福島 豊

室町時代の短篇小説

近藤 忠義

日本史基礎講座、第九講、近代(II)

家永 三郎

明治の人力車夫について

福地 重考

近代小説の運命

水野 明善

著書論文目錄

森 薫

同 一八ノ十二(十二月)

《特集・源氏物語》

源氏物語の成立に關する試論(上)

風卷景次郎

學寮創建の財的支援者高木宗賢について

日野 環

近世の繪畫に就いて(下)

田中 一松

源氏のかかれた「不思議」について

佐山 濟

同 二九ノ二(同年十二月)

松原 祐善

庄内の古甲冑

佐藤 東一

源氏物語の方法

西郷 信綱

同 三〇ノ一(二五年九月)

多屋 弘

村山地方中通地區の古切支丹

丸山 茂

玉鬘をめぐる

秋山 虔

大谷本願留守職考(上)

三品 彰英

近世における對鮮密貿易と對馬藩

森 克巳

源氏物語の本旨

武田 宗俊

靈靈儀禮と神話(下)

舟橋 一哉

人文學報 二(九月)

水野家史料および東京都史料

源氏物語研究の新方向

池田 龜鑑

阿含における緣起説の二面について(上)

舟橋 一哉

社會經濟史學 複三

本百姓の一般的形成について(2)

源氏物語研究文獻年表

中世 浩

史蹟と美術 二〇ノ七(九月)

東山文化とその社會的背景

幕末における信州伊那の農民騷動史料

藤田 五郎

もじりの歪曲性と町人意識について

藤井 和義

興福寺南圓堂諸像の研究

毛利 久

畿内周邊に於ける封建社會の成立―丹波國

西日本史學 第四號(九月)

日向國富庄について

日本上代彫刻の展開(五)

小林太市郎

近代名古屋の經濟的投影

服部謙太郎

選民的歴史觀について

日高 次吉

講座・佛像彫刻を見るものゝために

石村 亮司

代及條里制起源考

黒羽兵治郎

唐津藩に於ける赤子養育法

鹿島 仁

近江百濟寺の遺寶

川勝政太郎

武藏國分尼寺の位置について

齋藤 孝

安國寺遺蹟

河野 雄

興福寺南圓堂諸像の研究(中)

毛利 久

歴史評論 四ノ七(九月)

《特集・英雄時代》

史學研究 第二集(廣島史學研究會)

《特集・封建社會の分析》

興福寺講堂再論

向井 芳彦

《特集・英雄時代》

日本に於ける英雄時代

莊園制度崩壞にいたる道程について

魚澄惣五郎

羽陽文化 山形縣文化遺産保存協會

八號

置賜に於ける徳一文化の考察

川崎 浩良

庄園村落の展開

宮川 滿

大谷學報 二九ノ一(二四年十月)

村岡 久人

安藝國三田郷私領化の一考察

西郷 信綱

石母田 正 美術・工藝・建築 福尾猛市郎 「半雲亭」に就いて 吉田 敬造

《講座》繩文式文化について 江坂 輝彌 府城山口の發展 澤陵史學 第三號(神奈川県立横濱翠高等學

漁村史研究の方法について 服部 一馬 義隆論 岡不 可止 校歴史地理學會)

「被官」への蔑視はどうして生れたか 大内氏と大寧寺 河野 通毅 《江戸時代特集》

近世關東農業史の諸問題 平澤 清人 國語國文 一九〇一(一九六) (九月) 江戸時代に於ける庶民文藝の發達とその時

關東地方史研究會 安樂庵策傳とその周圍 中村 幸彦 代性 鈴木 崇夫

今昔物語卷十七出典考 落窪物語の人物とその成立 塚原 鐵雄 江戸時代に於ける商業の發展と商人の擡頭

同 四ノ八(十一月) 色里三所世帯 岸 得藏 思想 三一六(十月) 幕末開港條約の經緯に就いて 石井 文夫

《特集》自由民權から社會主義へ 平野義太郎 書紀の一性格 西宮 一民 近代傳記文學の先驅者 E・H・ノーマン

社會主義運動の黎明期 福島事件覚え書 遊京漫録と馬琴 後藤 丹治 同 三一八(十二月) 忘れられた思想家―安藤昌益―雜感

秩父事件 井上 幸治 大矢數題材管見 前田金五郎 同志社商學 二ノ二(十二月) 明治初年における我國鐵道政策の動搖とその

△歴史學の方法についての感想 石母田 正 堺文化 第一輯 堺市に残る金石文一覽表 林利喜雄推 同志社商學 二ノ二(十二月) 明治初年における我國鐵道政策の動搖とその

東豫における慣行小作權の研究 山本 重信 定開口神社の舊趾に就て 快田和尙と神風寺の再興 緒方 梅歌 近世における對馬の朝鮮貿易と其の取締に

臺灣民族解放運動史 向山 寛夫 堺隣事年表 堺刊行書堺人著作書綜合目錄 河野 司書 ついて 山形大學紀要 人文科學 第二號(十二月)

大内時代とその文化(三輪孝編、山口縣知事 御南生翁市 堺關係書第一回踞長文化調査 濱田 市造 山形大學紀要 人文科學 第二號(十二月)

公室發行) 大内時代概説 三坂 圭治 五ヶ莊の聞書 松本 壯吉 古代辯帳の御戸と房戸について

對外關係 廣永 達夫 五ヶ莊に於ける小字調査 松本 壯吉 岡本 望次

學問と文學 小川 五郎 化政時代の堺佛壇 大野 翠峰 佛教史學 第四號(佛教史學會)

大内版と大内文庫

著書論文目錄

一一一

平安中期に於ける在家信者の受戒精神の展開

中世に於ける東大寺八幡宮倭寇の變質と初期日鮮貿易

村山 修一  
田中 健夫

立正史學 復刊第一號(通卷第十四號)(十月號)  
戰國時代の公家と佛教  
明治初年における中國人の日本觀

選擇集述疑の著者に就いて

石田 瑞磨  
大橋 俊雄

近世武家の家族動態  
聖德太子と神仙說話

竹内 利美  
林 幹彌

伊木 壽一  
有 高 巖

大秦廣隆寺藏二軀半跏思惟形像の中世に於ける傳來と信仰(上)

藤田嘉一郎

信濃(八月)(信濃郷土研究會)

有賀 積男

古代文化史の問題  
再び「古瓦名稱の變遷」に就いて

藝林 一の四

「むなくるま」考

山田 孝雄

信濃の利算

赤羽 千鶴

川崎 庸之

居蘇考

渡邊 幸三

宮大工資料

平林 富三

久保 常晴

敬語に表はれた上代文献の政治的性格(上)

青木 紀元

元祿時代に一つの線を引く

平澤 清人

町入階級の進展

一六化改新の理念についての一考察

青木 紀元

江戸時代山村の一例

竹内 治利

榑耕文化考  
日本史料の指導について

物語の系譜—伊勢：夕顔：花折る少將—

塚原 鐵雄

長野縣史編纂事業の経緯とその實現

史潮(大塚史學會編)第四三號(十月)  
近世初期における鑛山の領有經營の形態及び鑛山聚落の構造—阿仁金山の研究

同 一の五(十二月)

段階と定型—封建制についての覺書

高田 保馬

江戸時代における農村生活

市川雄一郎

小葉田 淳

木曾

平泉 澄

中野縣創設の當時

市村 威人

法華八講の成立と公家社會—日本講集團發  
展史序—  
櫻井徳太郎

浪速の儒者五井蘭州—特にその徂徠學批判について

三木正太郎

檢地と地積

矢崎 源藏

房戸口分田の穫稻數量について  
宮城 榮昌

敬語に表はれた上代文献の政治的性格(下)

青木 紀元

上田原町問屋日記について

箱山貴太郎

文藝と思想 第一號(十一月)  
心敬—その作品の非佛教性について

一六化改新の理念についての一考察

青木 紀元

川中島中の水油紋り

米山 一政

井手 恒雄

國史學 五三號

市川雄一郎先生略年譜及遺著論文目錄

古事記傳について  
倉野 憲司

江島生島事件と當時の演劇政策

前田 淑

歴史(東北史學會)第二輯(十一月)

仙臺市内の古代遺跡

伊藤 信雄

奥州總奉行について

高橋 富雄

秋田藩における物成の率について

半田市太郎

山寺入定窟の開扇

長井政太郎

丹波史談 記念特輯號(十二月)

近世前期における大堰川筋農村の構造

關 順也

近世村落に於ける入會地利用形態の發展

特に丹波地方を中心として

上田 正昭

「丹波城壘記」と「案下漫錄」小川 常人

經濟學論叢(同志社大學經濟學會)二ノ三

(十二月)

封建社會に於ける封建性と反封建性—小林 貞夫

良正教授の批判に關聯して—松好 貞夫

經濟系(關東學院大學經濟研究所)七號(十一月)

著書論文目錄

柴 三九男

經濟志林(法政大學經濟學會)十八ノ四(十二月)

鍋島 直康

近世八王子機業に於ける商人資本の展開

榎西 光遠

早稻田商學 九〇號(廿六年一月)

徳川幕藩體制の解體と農民一揆(二)—信州 伊那郡「南山三十六ヶ村難澁數願日記」—

入交 好脩

都市問題研究 一五集(十二月)

山縣有朋と地方自治—日本地方政治におけるプロシヤ主義研究の一齣—吉川末次郎

史學研究記念論集

中世村落における農民と地侍 宮川 滿

鎌倉時代の國術論 松岡 久人

東國武士團の西遷とその成長 河合 正治

室町・戰國期の歴史思想 後藤 陽一

近世初期近江地方檢地帳の研究

河井勇之助

白石晩年の學問

森原 章

近世村落構造に關する一考察

谷口 澄夫

文化史學 第二號(一月)(同志社大學文學部)

石田 寛

備中國勇崎押山濱に於ける雇傭労働關係—瀬戸内鹽業の史的研究— 河手 龍海

美術史研究講座 第一講 鎌倉時代の肖像と繪傳—其の内的關係の文化史的探究— 石田 一良

東洋思想史論攷 福井康順著(A5判)三五頁 法藏館 四三〇圓

古蘭 大川周明譯(A5判)八六八頁 岩崎書店 二二〇〇圓

中國工業労働論 戸田義郎著(A5判)二九頁 巖松堂 三三〇圓

師宣策東海道分間之圖について

備中國勇崎押山濱に於ける雇傭労働關係—瀬戸内鹽業の史的研究— 河手 龍海

美術史研究講座 第一講 鎌倉時代の肖像と繪傳—其の内的關係の文化史的探究— 石田 一良

東洋思想史論攷 福井康順著(A5判)三五頁 法藏館 四三〇圓

古蘭 大川周明譯(A5判)八六八頁 岩崎書店 二二〇〇圓

中國工業労働論 戸田義郎著(A5判)二九頁 巖松堂 三三〇圓

中國—民族と土地と歴史—(岩波新書) ライモア著 小川修譯(二五二頁) 九〇圓

東洋思想史論攷 福井康順著(A5判)三五頁 法藏館 四三〇圓

古蘭 大川周明譯(A5判)八六八頁 岩崎書店 二二〇〇圓

中國工業労働論 戸田義郎著(A5判)二九頁 巖松堂 三三〇圓

中國—民族と土地と歴史—(岩波新書) ライモア著 小川修譯(二五二頁) 九〇圓

東洋思想史論攷 福井康順著(A5判)三五頁 法藏館 四三〇圓

古蘭 大川周明譯(A5判)八六八頁 岩崎書店 二二〇〇圓

中國工業労働論 戸田義郎著(A5判)二九頁 巖松堂 三三〇圓

中國—民族と土地と歴史—(岩波新書) ライモア著 小川修譯(二五二頁) 九〇圓

東洋思想史論攷 福井康順著(A5判)三五頁 法藏館 四三〇圓

古蘭 大川周明譯(A5判)八六八頁 岩崎書店 二二〇〇圓

中國工業労働論 戸田義郎著(A5判)二九頁 巖松堂 三三〇圓

中國—民族と土地と歴史—(岩波新書) ライモア著 小川修譯(二五二頁) 九〇圓

東洋思想史論攷 福井康順著(A5判)三五頁 法藏館 四三〇圓

古蘭 大川周明譯(A5判)八六八頁 岩崎書店 二二〇〇圓

中國工業労働論 戸田義郎著(A5判)二九頁 巖松堂 三三〇圓

中國—民族と土地と歴史—(岩波新書) ライモア著 小川修譯(二五二頁) 九〇圓

東洋思想史論攷 福井康順著(A5判)三五頁 法藏館 四三〇圓

古蘭 大川周明譯(A5判)八六八頁 岩崎書店 二二〇〇圓

中國工業労働論 戸田義郎著(A5判)二九頁 巖松堂 三三〇圓

中國—民族と土地と歴史—(岩波新書) ライモア著 小川修譯(二五二頁) 九〇圓



究會 一五〇〇回

中國史上におけるデフレーションに就いて

中國前期的資本の役割

田山 茂

中國史概説上(岩波全書) 和田清著(二六九頁 二〇〇回)

國史學 五三(十月)

穂積 文雄

同 三(十月)

趙翼の生涯とその史學思想について

東洋の文化と社會 京大支那哲學史研究會編

倭寇の變質と初期日鮮貿易

田中 健夫

中世における雲南の貝貨

子安七四郎

(A5判 二〇七頁 教育タイムス社 二〇〇回)

史淵 四四(八月)

總章元年唐將薛仁貴の攻陥せる扶餘城

史學雜誌 五九ノ八(八月)

杉本直治郎

東洋史統卷四 市村讚次郎著(A5判 九九

北宋前半期に於ける廢監租佃の問題

日野開三郎

學的研究

五頁 富山房 八五〇回)

北宋前半期に於ける廢監租佃の問題

古川 新平

同 五九ノ九

中國古代社會經濟の研究 井村薰雄著(A5

同 四五(十一月)

隋唐に歸屬せる粟末靺鞨人突地稽一黨

附説 唐に歸屬せる粟末靺鞨烏素固部

岩生 成一

〔論文〕

愛知大學文學論叢三(十一月)

朝鮮の家祭—文化社會學の見地から—

秋葉 隆

同 五九ノ一〇(十月)

阿片戰爭當時に於ける清朝とネパール及び

印度との關係

鈴木 中正

近世における對鮮密貿易と對馬藩

森 克己

岩手史學研究六(八月)

唐代に於ける雲南の稱呼

鈴木 俊

同 五九ノ一一

大谷學報 三〇ノ一(九月)

穀靈儀禮と神話(下)

三品 彰英

秦漢兩代における中國南境について

周藤 吉之

藝林 一ノ四(十月)

史學研究 二(八月)

近代化以前に於ける中國綿業の成立について

渡部 富義

同 五九ノ一二

居蘇考

渡邊 幸三

元代の寺院財産とその性格素描

横山 英

新疆ウイグル社會の農業問題

經濟論叢 六六ノ一・二・三(九月)

外蒙古封建制度の崩壞期に於ける賦役及び

思想 三一八(十二月)

佐口 透

經濟論叢 六六ノ一・二・三(九月)

同 五九ノ一〇(十月)

同 五九ノ一〇(十月)

同 五九ノ一〇(十月)

ロシアとモンゴル—草原史への一つの途—

護 雅夫

社會學評論 一 (九月)

東亞米作民族における財産制度の比較

牧野 巽

社會構成史大系 八 (九月)

民國革命 岩村三千夫

周藤 吉之

叙説 四 (六月)

孔子の學問精神

原 佑

帝王の權威と宗教

中村 元

王陽明晩年の思想

楠本 正繼

司馬相如について

吉川幸次郎

高叟と子弓

山田 統

老子「復歸」思想の論理的構造

大濱 浩

春秋著作説話の原形

わたなべたかし

古代中國思想史解釋の問題

佐藤 一郎

商大論集 二 (二月)

山名 正孝

中國經濟構造論の一問題

山名 正孝

同 三 (七月)

長部 和雄

管子輕重論

長部 和雄

人文地理 二ノ三 (七月)

須藤 賢

大連河沿岸都市の形態

川喜田二郎

東シベリアの乾燥タイガ

説林 二ノ一 (十一月)

ブルシアの語義について—ブルシア思想の展開 (一)—

佐保田鶴治

莊子における所謂天人について—有限なるものにおける無限なるもの象徴

笠原 伸二

詩經學の成立 (三)

白川 靜

茅盾—その人と文學—

相浦 果

芥川龍之介における東洋の繪畫

和田繁二郎

同 二ノ二 (十二月)

祭儀より密儀へ—ブルシア思想の展開

佐保田鶴治

(二)—

詩經學の成立 (四)

白川 靜

東方學報 京都一九 (十二月)

塚本 善隆

陳の革命と佛牙

陣勇の「農書」と水稻作技術の展開

天野元之助

宋代銅錢問題に關する新見解—わが國における發掘錢より出錢して—

日比野丈夫

文苑英華の編纂

花房 英樹

西夏の死都カラ・ホトの調査の概要について

松田 一政

中江丑吉氏遺著「古代中國政治思想」について

木村 英一

西日本史學 四 (九月)

北魏の西域交通に關する諸問題

船木 勝馬

日本文化 二八 (三月)

東インドにおけるキリスト教宣教師の學的寄與

中村 孝志

キリスト教の對フイリッピン流寓中國人傳道

少名子正義

蒙古古文より見たる滿洲實錄の研究 (二)

山崎 忠

朝鮮語文法 (一) 音韻篇—朝鮮文字の構造と發音

齋藤 辰雄

同 二九 (十一月)

キリスト教インド傳道史話—十八世紀のブ

黒田 親

ロテスタント—

齋藤 辰雄

朝鮮語文法 (二) 體言篇

齋藤 辰雄

著書論文目錄

日本歴史 三〇(十一月)

朝鮮民族の發展

同 三一(十二月)

朝鮮半島の運命

農業総合研究 三(七月)

中國の米作

文化 二ノ四(十月)

雑戸と品部

民族學研究 一五ノ一(八月)

契丹射柳歌

佛教史學 三(六月)

唐室の創業と茅山派遣教

俗講と變文(中)

同 四(十月)

元代普度の白蓮宗復興運動

俗講と變文(下)

佛教印度の地理的考察

立命館文學 七六(九月)

中國古代に於ける人間の解放とその主體性

の自覺(五)

理論 一四(十月)

アジア政策の新動向

歴史 二(十一月)

和田 清

岩井 大慧

大橋 育英

曾我部靜雄

島田 正郎

宮川 尙志

那波 利貞

小笠原宣秀

那波 利貞

春日 禮智

笠原 仲二

岡倉古志郎

中國史學の成立

歴史學研究 一四七(九月)

中國古代における遊牧國家と農耕國家

同 一四八(十一月)

明末長江デルタ地帯における地主經營

—沈氏農書の一考察—

—沈氏農書の一考察—

歴史評論 四ノ八(十一月)

臺灣民族解放運動史(一)

西洋史關係(著書)

世界史研究 廣島史學研究會編(A5・上卷

一八〇頁、下卷二四〇頁、松原書店、上、

一二〇回、下、一三〇回)

世界史 村川、江上(A5・三一九頁 山川

出版社、一四〇回)

世界文化史 中卷 加茂儀一(B6・三五七

頁、三笠書房、二五〇回)

古代の世界 山崎宏編(B6・一五七頁、金

星堂、一〇〇回)

中世の西洋と東洋 山崎宏編(B6・三四七

頁、金星堂、一〇〇回)

西洋文化史論大系I 東北大學西洋史研究室

編(A5・大谷書店、二五〇回)

岡崎 文夫

近代資本主義社會(京大西洋史)市川承八郎

(B6・一四六頁、創元社、一一〇回)

近代西洋文化(京大西洋史)井上智勇(B6

・一九七頁、創元社、一四〇回)

西洋史備要(京大西洋史別卷)前川、會田、

今津共編(B6・一九五頁、創元社、一五

〇回)

西洋史辭典 原、井上共編(B6・六四九頁

創元社、六〇〇回)

世界歴史辭典 伊豆、石母田、高橋、井上、

江口編(五B6・五一〇頁、白揚社、四四

〇回)

世界思想辭典 高島、古在、高桑、中村編

(B6・八五〇頁、河出書房、六五〇回)

現代思想史辭典 新明正明他(A5・七四頁

創元社、七五〇回)

宗教辭典 河野、椎尾、菅編(B6・五〇〇

頁、堀書店、七五〇回)

歴史の研究II トインビー 蝦山、阿部譯(A

5・六〇一頁、社會思想研究會出版部、四

一〇回)

ギリシア文化史VI ブルクハルト 新關良三

譯(B6・四四五頁、東京堂、三五〇回)

イェス時代史の研究 大島清(要書房、九五〇回)

キリストの生涯 J・M・マリイ 中橋一夫譯

(B6・創元社、一六〇回)

イェスの生涯 E・モリアック 杉捷夫譯

(B6・二五八頁、創元社 二四〇回)

イェス―精神醫學的考察―シュワイツェル

野村實譯(B6・九二頁、みみず書房、一〇〇回)

西洋繪畫發達史 相良徳三(A5・二二六頁

三笠書房、五五〇回)

西洋美術史概説 坂崎坦(風間書房、五五〇

回)

様式の歴史―西洋美術―(岩波書店、一〇〇

回)

世界美術全集十七 ルネサンスII 西洋十六

世紀(B5・平凡社、六八〇回)

美術史の基礎概念 ヴェルフリン 宇屋謙二

譯(A5・岩波書店 五〇〇回)

近代社會の成立(社會科學講座第八卷)(A

5・弘文堂、二〇〇回)

社會發展の法則と類型 上原專祿、原始社會

岡田謙、奴隸制社會 村川堅太郎、封建社會

著書論文目錄

鈴木成高、資本主義社會の形成 大塚久雄、

アジア社會の史的發展 平野義太郎、近代革

命の理論 aブルジョア革命の理論 中村哲

bプロレタリア革命の理論 猪木正道、變革

過程の史的分析 農奴解放 増田四郎、アメ

リカ獨立革命 中屋健式、フランス革命 高

橋幸八郎、産業革命 堀江英一、十九世紀の

諸革命 林健太郎、明治維新 遠山茂樹

歐洲經濟史 秦玄龍(A5・三四八頁、古明

地書店 四〇〇回)

近世西洋經濟史研究序説 白杉庄一郎(A5

・五〇三頁、有斐閣、五〇〇回)

近代經濟學の展開 中山伊知郎(A5・三〇

四頁、有斐閣、三〇〇回)

近代資本主義の成立 高橋幸八郎編著(A5

・二九三頁、東大協組出版部、三〇〇回)

ゾムバルト「近代資本主義」木村元一(B6

・四一一頁、春秋社、二三〇回)

英國財政史研究 長谷田泰三(A5・二八五

頁、勁草書店、四〇〇回)

英國近代經濟學序説 末永隆甫(B6・二二

四頁、三笠書房、一八〇回)

絕對主義論批判 白杉庄一郎(A5・二五三

頁、三一書房、二七〇回)

先驅者たち―デドリロの百科全書―(B6・

日本評論社、一六〇回)

フランス革命史 本田喜代治(B6・三三七

頁、評論社、二三〇回)

フランス革命 上下 ビエール・ガクソット

松尾邦之助譯(B6・上 三四二頁、下三

六六頁、讀賣新聞社、上三五〇回、下二五

〇回)

市民革命の構造 高橋幸八郎(A5・二五八

頁、御茶の水書房、二七〇回)

産業革命 鈴木成高(アテネ新書 二二一頁

弘文堂、一八〇回)

近代デモクラシーの形成と發展 小松春雄

(B6・二九九頁、小峰書店、二〇〇回)

近代米國の社會思想史 細入勝太郎(A5・

中文館書店、五六〇回)

米國農村の行財政研究 東井金平(A5・二

二八頁、農村週報社、三五〇回)

アメリカの選舉制度 上 内田力藏(B6・

二九八頁、東大協組出版部、二三〇回)

ロシア革命史 トロツキー 山西英一譯(B

6 弘文堂 第一卷 帝政の顛落 上卷 三

六七頁、二八〇回、第二卷、下巻、三二四

頁、二六〇回、第三卷反革命の陰謀五三五

頁、三八〇回、第四卷、ソウイェトの勝利

上巻二九四頁、二三〇回)

社會發展略史 小林信(B6・六一頁、五月

書房、一八〇回)

社會主義國家の法 上下 山之内一郎(B6

・東大協組出版部、上巻 二七四頁 二〇

〇回下巻、三〇六頁 二五〇回)

資本主義と社會主義(現代社會思想講座第四

卷)(A5・二二三頁、春秋社、二〇〇回)

現代のコムミュニズム(現代社會思想講座第

三卷)(A5・二二六頁 春秋社 二〇〇

回)

五十年の前進 英國労働黨發展史 下、ウイ

リアムス 鈴木茂三郎譯(B6・實教出版

株式會社、二三〇回)

第二次大戰回顧録7 チャーナル(B6・毎

日新聞社、三五〇回)

現代革命の考察 下 ラスキ 笠原美子譯

(B6・二九四頁、みすず書房 二〇〇回)

戰爭と革命 猪木正道(雲井書店、一〇〇回)

學問への現代的斷想 上原專祿(B6・弘文

堂、一三〇回)

マックス・ウェーバー ヤスバース 樺俊雄

譯(B6・一四七頁 創元社 一三〇回)

政治について トーマス・マン 芳賀 檀譯

(B6・二六一頁、創元社、二四〇回)

信仰と歴史 ニーバー 飯田紀元譯(新教出

版社、三八〇回)

現代世界の考察 ウァレリイ全集 佐藤正彰譯

(B6・二七〇頁、筑摩書房、二七〇回)

イギリス産業革命史上 トインビー 原田三

郎他譯(世界古典文庫、日本評論社、一〇

〇回)

ローマ衰亡史I ギボン 村山勇譯(岩波文

庫、六〇回)

ベルシア人の手紙上下 モンテスキュー 大

岩誠譯(岩波文庫、上下各六〇回)

ロシアにおける革命思想の發達について ゲ

ルツェン 金子幸彦譯(岩波文庫、六〇回)

マックス・ウェーバー 青山秀夫(岩波新書

九〇回)

民主主義の先驅者ウイリアム・ベン ウィニ

ング夫人 高橋たね譯(岩波新書、九〇回)

アメリカ人の教養 (C・クルックホーン 他

八名 飯野紀元譯(岩波新書、九〇回)

ミレリとコロイ 内田巖(岩波新書、九〇回)

【雜誌論文】

社會經濟史學 十六ノ三(九月)

民族移動の經濟史的研究 秋草 實

サー・ウイリアム・ジェムズ・アシユリイ

ジョン・ハラルド・クラバム 野村兼太郎

最近十年間の米國經濟史學界 高村 象平

同 十六ノ四(十一月)

ランカシヤ木棉工業の發展とその歴史地理

的條件(上) 小原 敬士

ユストゥス・メーザー 上原 專祿

ベンジャミン・フランクリンと農業 木村喜久彌

史學雜誌

同 五十九ノ十(十月)

ルネサンス精神史について 西村 貞二

同 五十九ノ十一(二月)

ジャクソニアン・デモクラシーと東部の勞

働者―シユレジンガー・ジュニア學說批

判― 三浦 進

最近におけるアメリカ史學の發達

同 五十九ノ十二(十二月)

ケエフ・ロシアの「封建制」と「農奴制」の問題

ノールズ  
鳥山 成人

思想 三一五(九月)

政治學體系の總合的批判

主權概念について

議會制・革命・共產主義

個人的自由と社會的統制

アメリカ觀

同 三一七(十一月)

封建關係の法的性格

トーマス・モアにおけるヒューマニズムとカトリシズム

久保 正幡  
竹内 幹敏

同 三一八(十二月)

ロシアとモンゴル—草原史への一つの途

家族共同體理論の批判

一橋論叢 二十四ノ四(十月)

中世ドイツ國王選舉と多數決原理

護 雅夫  
布村 一夫

町田 實秀

大平 善精

同 二十四ノ六(十二月)

I・M・C・Oへの路

著書論文目錄

ジョーン・ロツク

の教育論

人文研究 一ノ十(十月)

十八世紀イギリス小説とイギリス市民社會

基督教文化 五二(十二月)

世界教會の現状 D・M・ニーマラー他

西洋史學 VIII

ルソー「學問藝術論」について

十九世紀末アメリカ外交政策の展開(下)

ジョン・ヘイの國務長官就任について

ミルトンの政治思想とその社會性

スメルドからザクアへ

西日本史學 四(九月)

クリミヤ戰役に對するビスマルクの政策

同 五(十月)

イギリス莊園における村落共同體の性格について

展望(十二月)

ルソー「懺悔錄」

中央公論(十二月)

歴史におけるナシヨナリズムの發展

人文地理學關係 [著書]

人文地理學通論 藤岡謙二郎著

文明の原動力 E・ハンチントン著 西岡秀雄譯(A5判六二頁 實業之日本社)

新都市の形態 S・E・サンダース A・T・ラバック著高山英革譯(技術資料刊行會 八五〇頁)

生き残る道 W・ヴォート著飯塚浩二譯(トッパン 二八〇頁)

地球の傳記 G・ガモフ著崎川範行譯(白揚社三五〇頁)

地理學評論 二三ノ七(七月)

椋名山東南麓に於ける村落居住形態の研究

東京に於ける水上生活者の生成 山鹿 誠次

Yinland: 白人と新世界との最古の交渉

地理學評論 二三ノ八(八月)

藩政時代に於ける阿波藩低地部の人口構成

谷岡 武雄

矢嶋 仁吉

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

山鹿 誠次

と土地所有

岸本 實

地理學評論

化

井出 榮二

九十九里濱砂丘の開拓と利用

小川 武

夏秋蠶造作の小氣候學的考察

三澤 勝衛

地理學に於ける歴史學的方法と動態的方法

地理と航空 [E. de Martonne]

辻村 太郎

關東地方に於ける桑園増加形態

齋藤 叶吉

近世相模野の新田開發—相模野農業開發の研究(その一)—

辻村 太郎

沼澤地開發の新田に行われた割替制度

菊地 利夫

近世相模野の新田開發—相模野農業開發の研究(その二)—

地理學評論 二三ノ九・一〇(十月)

新田地理 四ノ一〇(十二月)

越中平野における河川水の利用—主として灌漑用水に關連して—

那須扇狀地の農業地理(第三報)—水田地

人口移動からみた近世の都市と村落—那賀川下流低地の場合—

關東平野の農作業慣行

域と畑地域との對比 (Z・E) 農業收入—

松井 勇

近世相模野の新田開發—相模野農業開發の研究(その二)—

堀江 元

地理學評論 二四ノ一(一月)

南部酒造用稼による農家經濟層の昂進性について

氣候馴化論の學史的背景(3)—第一次世界大戰後に於ける當論研究の目的意識究明—

利田 俊二

史林 三三ノ四(八月)

トゥオミーネン・トゥルク市の勢力圏

吉備高原における水田度と普通畑率

史林 三三ノ六(十二月)

木内 信藏

一巻

史林 三三ノ六(十二月)

脚氣の季節變動に關する研究(第一報)—

景觀の意味と表現 (M. Schmidt)

中世の世界圖に就いて

時系列解析について—

新地理 四ノ九(十一月)

會的機能について—

榎山 政子

ジャワの人口密度—ジャワ人口の地理學的研究—第一報

人文地理 二ノ三(七月)

千葉 徳爾

別技 篤彦

大連河沿岸都市の形態

有末 武夫

ウエーバーの工業立地論について

農地解放と山村經濟

田中 豊治

阿部市五郎

東シベリヤの乾燥タイガ

田中 豊治

濱名湖沿岸の養魚—主として戰爭前後の變

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

谷岡 武雄

別技 篤彦

川喜田二郎

大都市地域における都市群の研究

小林 博

丹後機業（主として縮緬機業）の現状と其の立地因字 中山 修一

East Africa E.B. Worthington

南のはての自然村

今西 錦司

人文研究 一〇二二（十二月）

The Failure of the Philosophers to sail with Cook in the Resolution H.C. Ganneron

木村町としての櫻井

松川 勇治

所謂環濠集落について—大和平野を中心として見たる— 村松 繁樹

Irrigation as a Solution to Agrarian Problems in modern Spain J.M. Houston

人文地理 二ノ四（十月）

地方市場の発展・残存と其の要因に關する歴史地理的研究

喜多村俊夫

DIE ERDE, Heft 1, 1949, Die griechischen Seen

Urban Hinterlands in England and Wales: An Analysis of Bus Services F.H.W. Green

オーネストラリアの人口分布と其の動態

河地 貫一

Der Gardasee und sein Jahr H. Lehmann

THE JOURNAL OF THE MANCHURIAN GEOGRAPHICAL SOCIETY Vol. LIV, 1947-49

西濃水運の地域的構造

海野 一隆

Berliner Wirtschaftskarten H. Seifert

Town and Village in Burma. W. Kirk

交通路の變遷と集落の盛衰に關する一考察

河原 常雄

DIE ERDE, Heft 2, 1949/50

Central Europe To-day W. Cross

漁村の地理的性格

佐々木清治

Zur Ökologie menschlicher Lebens-fürhmung in den afrikanischen Tropen

Through India to the Himalayas. B.L. Gandon

テラマーレの性格

藤岡謙二郎

J.H. Schultze

Some Epics of Australian Exploration E. Gervard

大都市郊外の蔬菜栽培と都市の自給圏の構造

乾 幸次

Die Stadt Küstendli in SW-Italien und ihre Umgebung J.F. Fellert

Parts of Barbary T.N.L. Brown

花園村に於ける花卉栽培

金崎 肇

Angkor, eine Stätte althindischer Kultur H.J. Krug

考古學關係〔著書〕

都市研究四二の一（一月）

南 實

THE GEOGRAPHICAL JOURNAL, Vol. LXVI Nos 1-3

文化人類學 大場千秋著（A・一・一九七頁）

地方行政單位としての郡の検討

伊藤 博

English Maps and Map-Makers of the 16th Century J. Lynam

Geography and the Development of

都市の面積統計について

小古間隆藏

東山論叢 二（七月）

著書論文目錄

著書論文目錄

著書論文目錄

著書論文目錄

著書論文目錄

著書論文目錄



世界社・二二〇回)

文化人類學 棚瀨襄爾著(アテネ新書・一九二頁・一七〇回)

人類の起源 清野謙次著(アテネ新書・二〇七頁・一七〇回)

考古學の研究法 齋藤忠著(B6・二〇〇頁 吉川弘文館・一五〇回)

古代史通論(世界史通論第一卷第一分册) 角田文衛著(A5・一九〇頁・三明社・二八〇回)

仙臺市内の古代遺蹟(仙臺市史3―別篇1) 伊東信雄著(A5・一〇六頁)

北九州古文化圖鑑 第二輯 九州考古學會編 (B5・圖版五〇葉・解説四二頁・福岡縣高等學校教職員組合刊)

モヨロ貝塚資料集 米村喜男衛著(B5・本文八二頁・圖版六二枚・野村書店・二、〇〇〇回)

渭南國立公園候補地學術調査報告書 渭南國立公園期成同盟會編(B5・一三〇頁)

中尊寺と藤原四代―中尊寺學術調査報告― 朝日新聞社編(A5・二六〇頁・三〇〇回)

人類科學―火についての共同研究および一般研究報告―八學會年報第二集(A5・一二四頁・關書院・一二〇回)

〔雜誌論文〕

新日本史講座(中央公論社)

古代前期の文化

考古學雜誌 三六ノ三(昭二五年九月)

銅劍鐵劍石劍の共存を示せる組合式石棺

甲州寺本慶寺の發掘

石田 茂作

八ヶ岳西山麓與助尾根先史聚落についての一考察

宮坂 英次

千葉縣香取郡下小野貝塚發掘報告

江森・岡田・篠遠

東京都三宅島の遺跡調査概報 曾野・中川

同 三六ノ四(昭二五年一月)

古代のモンゴリア

エリセエフ

モヨロ貝塚人の埋葬について

兒玉作左衛門

下北半島新石器文化の編年的研究

中島 全二

青森縣下北郡東通村瓦屋物見臺遺跡の調査報告

江坂 輝嗣

八ヶ岳西山麓與助尾根先史聚落の形成について

宮坂 英次

人類學雜誌 六一ノ四(昭二五年一〇月)

多紐細文鏡の一資料

梅原 末治

石器時代貝塚中の細菌について(第二報)

小片 保

札賚諾爾第三號頭蓋―遠藤隆次博士資料

鈴木 誠

明石西郊含化石層に於ける骨の保存可能性

渡邊 直徑

先史時代骨類の化學的一考察

田邊 義一

アイヌの人類學に關する文獻

須川 昭義

上代文化 十九(昭二五年六月)

遺蹟のもつ地理性―先史地理の問題―

中川 徳治

粘土標考

佐野 大和

山梨縣日下部中學校庭聚落遺跡概報

小田・上野

古代研究 第一輯(昭二五年一月)

櫛私考

大場 磐雄

鎮魂儀禮の一考察

松前 安彦

古代學研究 三(昭二五年九月)

古墳の農耕的性格の展開

森 浩一

戦後の考古學文獻總目錄 藤池澄子編

兩毛古代文化 二(昭二五年八月)

遺物と既成概念 埜野 武夫

栃木縣足利郡久野村加子遺蹟調査第一報 前澤 輝政

奈良時代寺院趾研究の方法 瀧口 宏

群馬縣川内村千綱谷戸石塚調査豫報 山崎 義雄

樂人を模したる附屬埴輪 山崎 義雄

群馬縣川内村千綱谷戸の一爐跡 近藤 義郎

群馬縣新田郡笠懸村中島遺跡調査報告(一) 周東 隆一

板倉・千綱谷戸兩遺跡發見の耳栓 江坂 輝彌

那須國造碑建立の史的背景 渡邊 龍瑞

桐生市岡山公園早期土器及普門寺早期土器の一斷片 笹木 隆三

桐生市廣澤町谷津遺跡調査概報 齋藤 義雄

史林 三三ノ四(昭二五年八月)

古墳時代における文化の傳播(下) 小林 行雄

同 三三ノ五(昭二五年一〇月) 史迹と美術 二〇ノ七(昭二五年九月) 興福寺南圓堂諸像の研究 毛利 久

同 三三ノ六(昭二五年一〇月) 史學雜誌 五九ノ一〇(昭和二五年一〇月) 日本上代彫刻の展開(四) 小林太市郎

同 三三ノ七(昭二五年一〇月) 古墳より見たる古代史上の諸問題 齋藤 忠

同 三三ノ八(昭二五年一〇月) 同 二〇ノ八(昭二五年一二月) 忍冬様文軒九五に就いて 梅原 末治

同 三三ノ九(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一(昭二六年一月) 同 二〇ノ九(昭二五年一二月) 興福寺南圓堂諸像の研究(中) 毛利 久

同 三三ノ一〇(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ二(昭二六年一月) 同 二〇ノ一〇(昭二五年一二月) 安閑天皇發見の白瑠璃碗 藤澤 一夫

同 三三ノ一一(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ三(昭二六年一月) 同 二〇ノ一一(昭二五年一二月) 廣隆寺講堂再論 向井 芳彦

同 三三ノ一二(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ四(昭二六年一月) 同 二〇ノ一二(昭二五年一二月) 朝鮮古代における支石墓社會の成立―北東 アジア古代社會の一形態― 村上 治郎

同 三三ノ一三(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ五(昭二六年一月) 同 二〇ノ一三(昭二五年一二月) 文化 二ノ四(昭二五年一〇月) 東北地方の彌生式文化 伊東 信雄

同 三三ノ一四(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ六(昭二六年一月) 同 二〇ノ一四(昭二五年一二月) 歴史評論 四ノ七(昭二五年九月) 繩文式文化について(三) 江坂 輝彌

同 三三ノ一五(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ七(昭二六年一月) 同 二〇ノ一五(昭二五年一二月) 繩文式文化について(四) 江坂 輝彌

同 三三ノ一六(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ八(昭二六年一月) 同 二〇ノ一六(昭二五年一二月) 民族學研究 十五ノ二(昭二五年一月) 考古學上より見た琉球―琉球先史學に關する叢書― 八幡 一郎

同 三三ノ一七(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ九(昭二六年一月) 同 二〇ノ一七(昭二五年一二月) 宗教研究 一二三 考古學上から見た我が上代人の他界觀念 大場 磐雄

同 三三ノ一八(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一〇(昭二六年一月) 同 二〇ノ一八(昭二五年一二月) 東洋の社會と文化 一(昭二五年一月) 朝鮮北部に於ける漢墓 梅原 末治

同 三三ノ一九(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一一(昭二六年一月) 同 二〇ノ一九(昭二五年一二月) 美術史 二(昭二五年九月) 美術研究 第一五七號(昭二五年一二月) 慶陵の壁畫(下) 田村實造・小林行雄

同 三三ノ二〇(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一二(昭二六年一月) 同 二〇ノ二〇(昭二五年一二月) 美術史 二(昭二五年九月) 長安の寺塔と壁畫(隋朝篇) 長廣 敏雄

同 三三ノ二一(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一三(昭二六年一月) 同 二〇ノ二一(昭二五年一二月) 日本上代經緯織私見 佐々木信三郎

同 三三ノ二二(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一四(昭二六年一月) 同 二〇ノ二二(昭二五年一二月) 佛敎藝術 九(昭二五年一〇月) 唐代の佛像彫刻 水野 清一

同 三三ノ二三(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一五(昭二六年一月) 同 二〇ノ二三(昭二五年一二月) 寶慶寺派石佛の分類 福山 敏男

同 三三ノ二四(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一六(昭二六年一月) 同 二〇ノ二四(昭二五年一二月) 阿育王柱の様式的考察 村田 治郎

同 三三ノ二五(昭二五年一〇月) 同 六〇ノ一七(昭二六年一月) 同 二〇ノ二五(昭二五年一二月) 維摩圖像攷 堂谷 憲男

同 一〇(昭二五年一月)

野間 清六

晉唐の觀音

小林太市郎

觀世音菩薩の展開

佐和 隆研

敦煌畫觀音圖資料

上野 昭夫

觀心寺如意輪

辻 晉堂

南都諸大寺僧仿の間取に就て

松本 榮一

建築史研究 二(昭二五年八月)

法隆寺東院七丈屋の復原

淺野 清

漢・六朝・飛鳥の格狭間

福山 敏男

越前永平寺の伽藍配置に就て

横山 秀哉

同 三(昭二六年一月)

周・漢・六朝・飛鳥の格狭間補遺

福山 敏男

ARTILIBUS ASIARUM voll. XIII 3 1950

Antiquities Examined from the Yin

Tombs outside Chang Te Fu in Honan

Province. Sueji Unehara.

An Indian Statuette from Pompeii.

Mirella Levi D'Ancona.

Notes Iraniennes IV. Le Trésor de Sa

Khez, les Origines de l'Art Méde et les

Bronzes du Lauriston.

R.Christman

Stalala-Proide, Déesse indienne de la

petite Verole. Jeanine Auboyer et

M-Thérèse de

Mallmann.

執筆者紹介

小林行雄

京都大學文學部

直木孝次郎

大阪市立大學法文學部

岡崎精郎

大阪大學文學部

河村盛一

神戸外國語大學

平山敏治郎

大阪市立大學法文學部

東 晶

京都大學文學部

次號預告(三四ノ四)

院内銀山の研究……………小葉川 淳

ドイツ帝國と文化闘争……………廣實源太郎

グプタ朝印度社會の一考察……………佐藤圭四郎

氣候馴化論の學史的省察……………和田 俊二

學界動向——中國封建社會への展望

池田 誠

書評・その他

前號目次(三四ノ一、二)

——機業特輯號——

津平野郷に於ける棉作の發展

……………高尾 一彦

ロンドン新冒險商人組合の設立

……………星田 輝夫

小松絹の發展……………岩井 忠熊

古代中國の機械技術……………太田 英藏

海外學界紹介——アルタイ・パズルイク

第二號墳の調査……………角田 文衛

機業關係著書論文目錄・書評・その他

# 彙報

## 史學研究会

理事會 十二月六日 午後二時 於進々堂

研究会役員の交替に伴う事務引継と今後の方針に關し、庶務會計編纂の狀況報告と協議が行われた。又地方委員及び會員との連絡を緊密にすることが提議された。更に原理事長より外國との圖書交換、連絡を積極的に進める様との指示を受ける。

例會 十二月十六日 午後一時—四時

於京大文學部史學第二教室  
平戸綜合調査に關する中間報告

國史 小葉田 淳

地理學 織田 武雄

考古學 樋口 隆康

民俗學 柴田 實

雨にも拘らず多數の來聽者あり盛會裏に終了した。

例會 二月十七日 午後一時—三時

於京都女子大學

一、史學の歩み出し 橋川 時雄  
一、ルネサンスに於ける 會田 雄次  
現實主義の問題

## 京大國史關係

讀史會例會 十月十四日(土)

明治維新と階級史觀 坂田 吉雄氏

一向一揆について 松山 宏氏

中世京都の林産業に 佐々木泰夫氏  
ついて

讀史會 出雲見學旅行 十月十六日—十八日

第一日(十六日)小葉田、柴田、横田各

先生以下學生、大學院學生を合せて二十名

の一行は、京都驛を十五日夜十時發の夜行

で賑やかに山陰へ旅立つた。翌朝七時三分

米子驛着。直ちにバスにて大山寺に向う。

ようやく紅葉しかけた大山の裾野を縫いつ

つ、途中の勝景を賞でながら大山寺理觀院

に至る。

昭和三年四月の大火で多くの寶物を燒失

したとのことで、古いものはなかつたが、

阿彌陀堂縁起一卷(天文二十二年)大山寺

文書一卷(觀應三年以後)徳川末期の大山

寺領内圖(庚午新秋雲城製鐵製)厨子など

を拜觀した。

ついで一老僧の案内にて阿彌陀堂に至る。堂宇は國寶にて七間四面、内部中央に阿彌陀如来、兩脇には觀音菩薩それぞれ侍立し、三體俱に國寶であり藤原時代の作である。

阿彌陀堂を出で、漸く紅葉し始めた山々を見つゝ坂道を登り、大神山神社奥宮にもうでる。建物は神佛混合にて、文化二年の建立なりと云う。寶物中、銘備州長船住兼光の短刀一口は國寶である。

色ずき始めたすずかけの下道をくだり、賽の河原に戯れつゝ理觀院にもどつて晝食をとる。青き日本海の眼下に開け、遠く鳥根の半島も煙つていた。

再びバスにて大山口に戻り、夕方五時半に玉造に着く。その夜は心地よき玉造の湯をあみて旅行第二夜の夢を結んだ。

第二日(十七日)

危ぶまれた前夜の雨も綺麗に晴れ、一同七時半のバスにて出發、八時五十分發の電車にて北松江驛より鰐淵寺に向う。

十一時鰐淵寺着。直ちに守護の奇造かと云われる壽永三年の銘文ある鐘を、更に開

山堂にて仁平年間作の金銅觀音像、經筒、湖州鏡を見學。次いで本坊にて晝食後、後醍醐天皇宸翰、名和長年書狀、毛利元就畫像等を見學。十二時半辭去して平田より一知電鐵にて大社に向う。

出雲大社では、まづ寶物館に入り、後醍醐天皇の宸翰繪旨、後醍醐、後宇多、後冷泉院院宣をはじめ、同案の美しきを以て有名な秋野時繪掛筒篋、クリス形劔、硬玉勾玉等を拜觀。ついで本殿の模型によつて所謂出雲造りの説明を受けた。寶物館を出て許されて本殿の眞近まで參入して出雲造りの實體に觸れ、更に社務所に行つて所藏の文書中南北朝時代のもの約百通をそれ／＼各百十通程づつ手にして讀み、時間に追われるまゝに午後四時社務所を辭し、大社驛より汽車にて宿所玉造に歸つた。

第三日(十八日)

前日の行程の疲れにもかゝらず、全員元氣に起床最後の日程に入る。七時三十分バスにて玉造温泉出發、混雜する車中から朝の宍道湖を眺めながら鳥根縣廳前にて下車、先輩多数に迎えられながら松江城に向

う。

慶長十二—十六年尼子氏の富田城を移して造り、他の城郭と異り實戰的に設計されているといわれる千鳥城は、地盤傾斜を機に五ヶ年計畫にて目下修理中のこととて、その英姿を外觀することは出来なかつた。しかし寄柱の使用、石落し穴、二重につくられた壁、四層の便所の設備等は、我々の興味をそゝるものが多かつた。

ついで城の北、濠端にある小泉八雲舊居に赴く。同所はヘルンが七ヶ月に互つて住んだという士族屋敷で、簡素なヘルンの書齋は東洋を愛した文豪の姿を偲ばせるものがあつた。又、同屋敷の西隣には八雲記念館があり、白壁造りの小じんまりとした建物に、ヘルンの遺品、筆蹟が所狭いまでに陣列されてあつた。

こゝを辭した一行は、徒歩にて松江市中を見物しながら松江驛に到る。

松江驛を後にした一行は、安來節で知られる安來に下車、バスを待つて清水寺に向う。

天臺宗に屬するこゝ瑞光山清水寺は、寺

傳によれば、推古五年の創建にかゝるものことである。尼子義久の祈願寺であつたため、毛利勢の襲撃を受け、四十九坊を有したという盛況は今みるべくもないが、京都の清水寺を思わせる當寺は、この地方の廣い信仰を集めているとのことである。一種の遊園地的性格を有するもの、如く修學旅行の小中學生で賑つていた。

さて、大同元年の落成という本堂(明治十九年解體修理、現在特別保護建造物)に入ると正面に明治三十五年國寶に指定されたという十一面觀世音菩薩が厨子中に安置されているが、年二回の御開帳以外は公開出来ぬとのことと、僅かに脇侍四天王像及び大同の銘ある六角の燈籠をみる事が出来たのみで、本尊を拜觀出来なかつたことは遺憾であつた。

文政年間の建立になる高さ百十尺の三重塔を經て常念佛堂に至る。こゝには木造阿彌陀如来及び兩脇侍坐像三尊(國寶、藤原末のもの)が安置されている。盜難にあつたといはれるこの堂の荒廢が眼に着く。寺務所で古文書類を拜觀した後、山道を通り

ながら雲樹寺に向う。

能義郡宇賀莊村なる當寺は臨濟宗妙心寺派に屬し、元享二年三光國師の開山になるものとされ、瑞塔山天長雲樹興聖禪寺とも稱し、國寶山門には同時代の勅額が掲げてある。

こゝでは開山三光國師畫像、銅鐘及び光嚴院、後村上、後醍醐天皇の御宸翰をはじめ數卷の繪旨等多くの國寶々物古文書類を拜觀するを得た。中でも高麗製といわれる銅鐘は一行に特に魅力的存在であつたようである。御宸翰繪旨等の古文書類も比較的時間に餘裕を得て、寺側より寄贈された小冊子と對照しながら拜觀することが出来た。山門・大門（特別保護建造物）を経て歸途についた一行はバスを待つこと久しくして、夕間迫る安來町に歸り、こゝで最後の豫定たる和銅記念館に入る。

同館では、この地方に古くから傳わる鍍（たたら）による鋼の製造方式、工程をまのあたりみることが出来た。この地に産出する眞砂鋼から日本刀の原料たる和鋼を造出する様子をバノラマ式な同館の陳列品か

ら理解することが出来た一行の收穫は、最後の見学箇所としては豫想以上に大なるものがあつたであらう。なるほど往途には奇異の感にうたれた安來町の煙突の林立も、特殊鋼工場ときいてうなづかれる。日本刀の資料に關する限り日本一と誇る同館を辭して安來驛に引返した一行は、やがて車中の人となり、三日間のめまぐるしい日程を終えた。

最後に、この度の旅行に一方ならぬ御配慮をいたゞいた鳥根大學の今石二三雄、原弘二郎、山本清、庄司久孝、並びに鳥根縣教育廳の陶山徹諸先輩方に、深甚の謝意を表する次第である。

讀史會例會 十月二十五日（水）

懇話會論争について 山本 四郎氏

柳田國男・折口信夫氏講演會 十月三十日

讀史會秋季大會 十一月三日（金）（詳細前號）

民俗學會例會 十一月十一日（土）

能登島について 平山敏治郎氏

長崎縣平戸島學術調査 十一月十二日—三十日

日（國史班—小葉田教授以下五名、民俗學班—柴田教授以下三名）

讀史會例會 十一月二十二日（水）

桃山時代障壁画について 土田 寛氏

古代土地所有について 東 晶氏

讀史會例會 十二月九日（土）

佐藤信淵について 前田 一良氏

元服について 河合 正通氏

長崎貿易について 廣田 明氏

### 京大人文學關係

談話會一月例會 一月二十日（土）午後一時

於賀習室 日振島の人口について 中山 修一

京都中央市場見學 一月二十五日（水）

吉田助手以下八名。

### 京大考古學關係

考古學談話會 十二月十六日午後三時より、百萬遍の合成

興に於て、忘年會を兼ねて談話會を開いた。

對馬のクロノロジ 水野 清一

平戸調査旅行談 釣田 正哉

水野・長廣兩教授「朝日文化賞」受賞祝賀會

教室に關係の深い兩教授が、今回「雲崗の

石窟」の研究により、受賞されたので、二月三日午後三時より本教室にてさやかながら祝賀會を開いた。水野教授は御病氣のため出席せられなかつたが、長廣教授を中心に諸先生を圍んで色々有益なお話があつた。

### 平戸調査考古學班

平戸綜合調査の考古學班は梅原教授差支えのため、樋口・釣田兩教室員が本隊より一週間おかれて十一月二十三日より參加した。今回は人員日數の都合もあり一般調査を目的とし、發掘は最少限度に止めた。主なる調査内容としては、繩文式關係の遺跡は最南端の志々伎村で二ヶ所を發見、中期以降の土器片や石斧を採集、彌生式關係のものとしては甕棺が南の志々伎と北の度島にあり、更に中央の根獅子からは貝輪をつけた同期の骨が箱式棺から出ているのをあたしかめることが出来た。古墳時代のものとしては船載鏡に勾玉管玉を副葬した古式古墳(箱式棺)が平戸町大久保や大島川内等にあり、後期古墳として横口式石室で祝部土器を主なる副葬品とする類が、大島度島生月の三島に分布していた。かくて從來要塞地帯のヴェールの下に全くか

くされていたこの地方の古代文化の様相が明らかに出来たことは大陸文化交渉の歴史をたどる上にも興味ある資料を提供したものといへよう。

### 二つの地方考古館の設置

終戦後地方での考古學研究熱が高まつて来たことから、それに關係した設備も段々と考えられていようであるが、中で關係の出土品を蒐集陳列して、その保存と知識の向上に資する爲の考古博物館が、昨秋中國地方で相次いで開館された。その一つは岡山縣の倉敷考古館で、他は兵庫縣の有平考古館である。

倉敷には早くから大原氏の經營に係る美術館があり、また民藝館も經營されていて、我が國では珍らしいこの種の文化施設を持つた地方都市であるが、同地が元來古の吉備の中心に位置した點で、史前の時代の遺跡遺物に富んだ環境にあるところから、地方の有志家の間に更には是等を蒐集陳列するための考古館を設けることが議に上つて、一昨年その期成會が出来、いろいろと奔走した結果、去年十一月一日にその開館を見るに至つたものである。館は民藝會と同じく、同市前神町の頑文

な倉庫に改造した風變りの建築で、規模は大きくないが、陳列の資料を廣く全縣下に求めて、上は石器時代から下は奈良平安朝までの遺品を網羅するにつとめ、それ等の系統的な陳列に當つては、新たに設けられた岡山大學法文學部の専門家の援助を求めるといふ用意の下に發足した。そして近く財団法人として基礎を固めた上、遺跡の調査研究をも併せ行うて内容の充實をはかる方針であるいふ。

岡山大學非常勤講師たる關係で、開館の事に關與した梅原末治博士から聞いたその最初の陳列品の主要なものを挙げると次の如くである。先づ史前の時代では、邑久郡黃島の押型文系の遺跡から、磯ノ森、羽島、彦崎、西岡、船元等の出土品を経て福田古城貝塚、中津、津雲等の諸遺跡に互る縣下の同時代遺物が系統的に陳列されたのであり、次の時期では都窪郡庄村に於ける彌生式土器の一群と、粒江種松山と後月郡木ノ子村から新たに見出された二つの銅鐸や、珍らしい裝飾文のある琴浦町から發見の平型銅劍等が目立つたもの。古墳關係品では、和氣郡鶴山古墳出土の鏡鏝類と同天神山から出た石枕を主とした一

聯の遺物が著しく、歴史時代では小田郡東三成の下道氏墓の藏骨器と、安養寺の瓦經等があり、その期では古瓦の時代を追ふた陳列も行はれたのであつた。

第二の有年考古館は、赤穂那有年町の松岡秀夫氏が、その住居地附近の古代遺跡の顯彰と、出土品の散佚を防ぐために、地方人士に協力を求めて設置せられたものである。従つてその規模の點では前者には及ばないが、氏の熱心と、地方人士の理解とによつて、從來地方に散在した關係資料が、零細なものまでも殆んど餘す所なく蒐集して、これ等の遺品が兵庫縣教育委員会の武蔵、烏田兩氏の指導の下に系統的に陳列、一般に公開されるに至つたもの。その點ではよく地方考古館としての望ましいあり方をとつたものといふべきである。なほ十月八日の開館式當日には詳しい郡内の遺跡地名表を添へた目錄が刊行され、梅原博士等の講演があつたが、今後も随時刊行物なり講演をもつゞける筈であるといふ。

### 黒川古文化研究所の開設

芦屋市の黒川幸七氏の先代は、かくれた東亞の古美術品の愛好家であつたので、その生

前集められた蒐儲の富は中國朝鮮内地のあらゆる部門に互つて居り、一部は國寶重要美術品に指定されているが、なほ多くのものは世に知られていなかつた。今度これ等の重要な文化財を永く保存する爲に當主は財團法人を設立したのであるが、從來の單なる陳列に依る一般への公開ばかりでなく、これ等の資料を學術上の研究に役立たしめる面に重點を置き、新たに黒川古美術研究所として出發、それらの部に研究員を依囑して既に事業を開始した。その開所式は來る三月廿三日の豫定で、廿四廿五の兩日は最初の一部收藏品の陳列と公開講演があるといひ、圖鑑もそれまでに第一冊が公にされるとの事である。

### 浪華藝文會

大阪に於ける東洋學研究者の會として、昭和二十四年十一月に浪華藝文會が成立し、爾來毎月研究会を開いて今日に至つた。會員は最初は二十餘名であつたが、現在では四十名を越え、神戸京都奈良和歌山方面からも有志者の参加があつて、次第に活氣を呈しつゝ、あらは喜ばしい。

昭和二十四年十一月二十六日

初會合、會の構成及び運営を議決。

同年十二月十七日

江戶初期の詞について

昭和二十五年一月二十九日

武田藥品工業株式會社の工場及び圖書館を

見學

同年二月二十五日五日

五穀の起元

同年三月二十五日

群漫談

同年四月十五日

中江丑吉氏遺著「中國古代政治思想」

同年五月二十七日

西域の南北道

同年六月二十五日（靜安學會と合同）

辻本史邑氏邸にて拓本・法帖・文房具等を

觀賞

書談

漢法醫學の話

同年九月十六日

最近の中國文學

同年十月二十八日

神田喜一郎

篠田 統

能田 忠亮

木村 英一

桑田 六郎

辻本 史邑

森田 幸門

高倉 克巳



敦煌本神農本草經集注を讀みて

渡邊 幸三

同年十一月十二日(ウラル・アルタイ學會と合同)

天理圖書館を見學

同年十二月十六日

洛陽伽藍記の研究について 森 鹿三

道教學會京都地區研究會

昭和二十五年秋、東京に於いて道教學會の發會式が盛大に舉行されたが、その事業の一つとして、京都支部に於ては定期の研究會を開く事となり、その第一回が左の如く開催された。

昭和二十五年十二月十八日

(發表) 支那思想史上に於ける道教の作用 木村 英一

なお、研究會は、今後二ヶ月に一回の割合で開かれる豫定である。

自然史學會

第三二回例會 昭和二十五年十月十四日

地質現象における時間の意義について

西原 正夫

第三三回例會 昭和二十五年十一月十九日

(ユーラシヤ學會との合同大會)

遊牧技術の基礎的諸問題

今西 錦司

遊牧民族の人口問題

梅棹 忠夫

蒙古源流の原本について

泉 靖一

第三四回例會 昭和二十六年一月二十五日

—正倉院の漢藥調査—

江 實

報告 二十五年度調査の結果

木村 康一

記録映畫の製作

森 鹿三

第三五回例會 昭和二十六年一月二十七日

映畫 武田藥品工業株式會社學術部提供

家族・氏族・社會 姬岡 勤

京大人文科學研究所

常設人文科學講座

二月一日 古代國家論

貝塚 茂樹

二月八日 漢唐首都論

森 鹿三

二月十五日 中世東西交渉史論

岩村 忍

二月廿二日 近世滿洲人の生活

安部 健夫

東京學術協會

一月例會 昭和二十六年一月廿五日

臺灣における精神病患者

中村 讓

ウラルアルタイ學會

戰後、ややもすれば「東洋」にたいする關心が薄れ勝となり、わけても北アジアにたいする興味の減退は著しいが、専門學界にあつても近來「北アジア學」の低調が憂えられる矢先、昨二十五年五月、石濱純太郎教授を中心に結成された「ウラル・アルタイ學會」は、大阪、天理、神戸各外大の東洋語ことに北アジア語學のメンバーに加えるに、阪大、神戸大、關西大など阪神方面の東洋史專攻者を以てし、北アジア語學と東洋史學、さらには民族學にたづさわる人々による「コーオペレーション」をなしとげんとしつゝあり、この意味において新しい成果が斯界の今後に期せられるのである。なお、すでに大阪にあつては、懷徳堂を根據として發足した靜安學社があり加えて昭和十六年、大阪言語學會が成り、いづれも東洋學關係者を包含しつゝ、逐次成果をあげ來つたのであり、これらの基盤の上こそ、斯會の誕生もまた可能であつたといえよう。

五月に發足、七月以後諸事情のためしばらく休止状態のち、越えて十一月より再び活

動を開始して年末に及んでいる。左に例會の講師と演題とを記しておく。(敬稱略)

五月 挨拶

石濱純太郎  
蒙古語文法書に及ぼせる西蔵語文法書の影響について  
稻葉 正就

六月 外家におけるロシア文字使用について

松 源一  
高橋 盛孝  
町と村

七月 女眞文字、金石資料とその解説について

長田 夏樹  
浪華藝文會と共催

十一月

石濱純太郎  
滿洲語の研究  
高橋 亨  
朝鮮に關する研究  
遊牧社會と農耕社會との接觸について  
岩村 忍

十二月

二二三近者の紹介—エーベルハルト教授の近業—  
内田 吟風  
西蔵語尾辭 Pa, ba, ma などの問題  
稻葉 正就  
にこにこ

### 編輯後記

本誌の原稿が編輯係の手をはなれて印刷工場へまわつたのは本年二月初旬のことであつた。ところが印刷工場と發行所との關係が少し微妙になつていたため初校が編輯係の手許に歸つて來たのは五月末、漸く出版の目やすがついたとたんに、京都を見舞つた大雨のためこんどは印刷工場が水びたしとなりまたまた出版が延期されたのである。其の上編輯係の怠慢も加わつて、何とも申譯ない次第になつた。會員諸兄に深くおわび申上げる。

本誌には大體古代史關係のものをあつめてみたのであるが、いづれも夫々の分野に於いて必らず問題になるに相違ない力作を發表していただき編輯係として執筆者諸氏に御禮を申述べたい。

卷末につけた英文のレジメについて、會員諸兄からの御意見を承ることが出来れば幸甚である。一讀お判りの如く各英文レジメは本文の「梗概」の英譯を骨子としているものである。

尚、第四號以下は、事情も好轉したのでつ

ぎ／＼出版されると確信しております。御期待下さい。  
藤澤 長治  
星田 輝夫

昭和二十六年六月二十五日印刷  
昭和二十六年七月一日發行  
定價八〇圓

史 林 第三四卷三號

編集人 京都大學文學部内  
史 學 研 究 會  
代表者 織 田 武 雄

發行人 大阪市東區新町一ノ六  
岸 本 貞 三 郎

印刷所 京都市右京區太秦上刑部町一〇  
大日本印刷株式會社  
京都工場

發行所 大阪市東區南新町一ノ六  
教育タイムズ社  
出版部

振替大阪七一九二〇番

## LEGENDS ON THE ORIGIN OF THE TURKS

—With especial reference to the  
origin of the Chu-ye clan of the  
Sha-t'o tribe—

*Seiro Okazaki*

It is generally accepted by most orientalists that legends on the origin of the Turks should be interpreted in the light of comparison with origin legends of such Ural-Altaiic peoples as the Mongols and the Tungus. The legend of the Turks that their ancestor was a wolf married to a human being constitutes a basic pattern of their origin legends. There is, however,

another kind of legends on the origin of the Chu-ye clan of the Sha-t'o tribe that their ancestor was brought up by a bird. This kind of legends is also found among other peoples than the Turkic tribes, and it seems to have been connected with remoter legends of K'un-mo, ancestor of the U-sun. But there is a difference between the description of the Nan-pu-shin-shu and that of the Wu-tai-shih-chi; the former says that the Chu-ye clan's ancestor was brought up by a bird, while the latter that he was born in the nest of an eagle. Such a difference seems to have derived from the rationalistic interpretation by Chinese historians of the origin legend of an alien race.

ヨーロッパの使節を引見するムガル皇帝

所在地 ベナレス、バブ・シターラーム・サフ藏

製作年代 十七世紀

大きさ 13 feet 4 7/8 × 9 feet 6 7/8

印度デリーに都したムガル王朝の輝かしい遺産は、アラベスクの回教建築と五彩をちりばめた細密画である。その細密画には好んで世俗的な題材が選ばれ、中でも肖像はムガル画家の特技であった。もちろん作品も多く、歴史家は歴代のムガル皇帝や二世紀にわたる高官の風貌をそれによつて知ることができるといわれている。この画はアクバル帝の孫、シャール・ジャハーン帝 (Shah Jahan 1627-1658) が、はるばる渡航せるポルトガルの使節一行を引見する場面で、シムメトリカルな構図と絢爛たる色彩とが、宮廷の威儀と華やかさを遺憾なく示している。使節團の男女は今や画面の左下の一隅から皇帝の前に進もうとしている。皇帝はしかし横を向いている。横向きはムガル肖像画家の常套的手段であつた。それ故これは、歴史的事件をあしらつた肖像画といふことができる。容貌のこれほど個性にみちた細密描寫は東洋では類がない。(上野照夫)